

「若き国」の新リーダー

フィリピン大統領選挙の結果と今後の見通し

防衛研究所主任研究官 富川英生氏が寄稿

フィリピンで6月30日、フェルディナンド・マルコス新政権が誕生する。マルコス氏の父は、かつて20年以上にわたって独裁体制を敷き、1986年の「エドゥサ革命」で失脚した故マルコス元大統領だ。人口1億1000万人超、平均年齢25歳という若い国フィリピンでは、独裁政權時代を知らない世代が有権者の過半数を占めるようになった。5月9日の大統領選挙で勝利したマルコスの選出過程と次期政權の行方について、防衛研究所理論研究部社会・経済研究室の富川英生主任研究官に分析・執筆をお願いした。



富川 英生(とみかわ ひでお)防衛研究所理論研究部社会・経済研究室主任研究官(1971(昭和46)年生まれ、兵庫県出身、千葉大学法学部卒業、東京大学大学院経済学研究科修士課程修了(経済修士)、東京大学大学院経済学研究科博士課程中退、東京大学防衛戦略研究課程修了、英シエールド大学東アジア研究課程修了(修士・東アジア研究)。2003年から防衛研究所勤務。専門分野はマレーシアを中心とする東南アジア諸国の経済・産業政策。近年はグローバルな防衛装備ビジネスや国際安全保障の経済的側面などの調査研究にも従事。最近の研究論文に「国防イノベーション・エコシステムのマネジメント(21年6月)」「ロボティクス・自律型システム・人工知能(RASIAWS)の運用に関する技術開発の動向と自律型兵器システムA(山口信二主研との共著)」「防衛研究所紀要」第22巻第2号(20年1月)など。

独裁時代知らない世代も

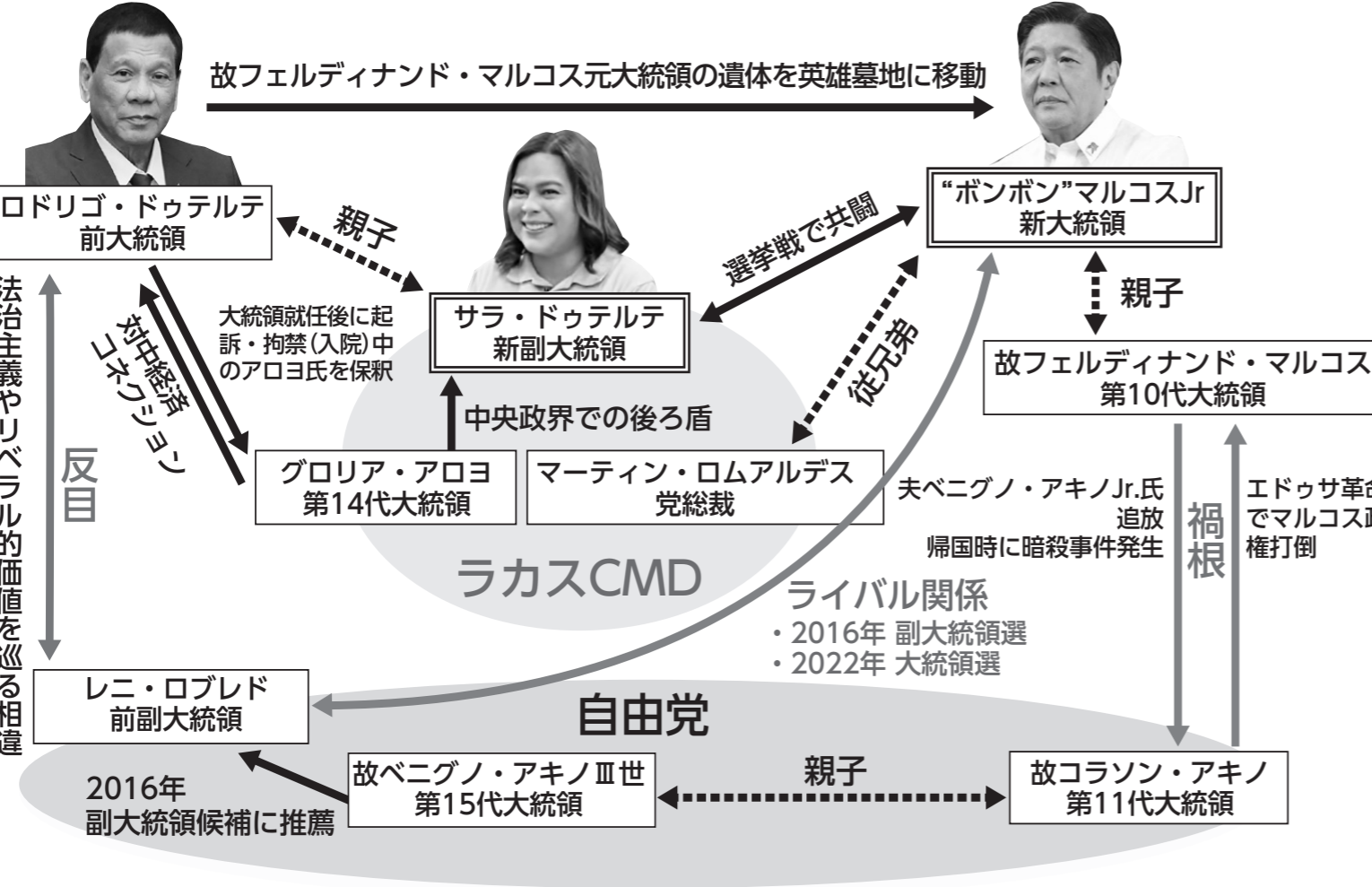
大統領選の結果

今年5月にフィリピンで行われた選挙では、タッグを組んだ大統領候補のフェルディナンド・マルコス・ジュニア(以下、ボンボン・マルコス)元上院議員(64歳)、副大統領候補のサラ・ドゥテルテ(以下、サラ)ダバオ市長(44歳)が、単に振り返る。フィリピンでは、選挙戦の経過を簡単に振り返る。大統領任期(6年)を4年以上務

候補者擁立をめぐり紆余曲折

候補が共に3000万票を超す史上最多の得票数で他陣営に大差をつけて勝利を確実にした。

長く知られているように、ボンボン・マルコス候補は故フェルディナンド・マルコス元大統領の長男、サラ候補はロドリゴ・ドゥテルテ大統領の長女である。



保守主義(ドゥテルテ派) ↑
自由主義(アキノ派) ↓

上院選への出馬を表明し、引退は撤回された。

一方で、早くから次期大統領選への出馬を表明し、当初は後継指名を受けたのでもと目されていた元ボクシング世界王者のマンニング・パキヤオ上院議員は、その後、ドゥテルテ大統領との関係が悪化し、結局は「PROMDI」から出馬することとなった。

最強タッグの誕生

国民の間で人気があり、リア・アロヨ元大統領の出馬を「PDPラバン」からも大統領選への出馬が期待されていたサラ市長は、当初はその意思を見せず、市長再選を目指していた。

しかし、候補者変更届の受付終了直前になり、グロ

ドゥテルテ政権の評価

では、今回の大統領選挙の争点について考える上で、まずドゥテルテ政権の評価を、日本貿易振興機構や、政權に批判的なマスコミへの厳しい締め付けなど、その強権的な統治スタイルについて整理してみよう。

まず、歴代大統領と異なる、ドゥテルテ大統領は誕生当初の高い支持率を中絶

国民の政治への期待

例えば、国際的な指標で、フィリピンの「民主主義」の評価はドゥテルテ政権誕生後に低下している

長(時代)であったと「スピン」したイメージを発信し続けた。

そして、副大統領選に敗れて以降の6年という長い時間を全て選挙に向けた準備に費やした。ボンボン候補はボンボン・マルコス候補の父の政治活動を行っていた。この高い満足度について

ステイグマの克服

ドゥテルテ大統領以上に厳しい歴史の評価を受けてきたのが、戒厳令を敷き、フィリピンに権威主義体制をもたらした故マルコス元大統領である。

ボンボン・マルコス候補にとって、その子息であるという事実は選挙戦を勝ち抜くために、どうしても克服しなければならぬステイグマ(不名誉な烙印、偏見・差別)であった。

マルコス家には父の執政時における巨額不正蓄財などに関する嫌疑が懸けられており、多額の返納を求められていた。また、母子マルダ・マルコスは汚職の罪で有罪判決を受けて控訴中の身であり、さらに、戒

人気投票?

以上のような背景の中で、2021年10月時点でのフィリスティックのフォロワー数はボンボン・マルコス候補が約400万人、サラ候補が約180万人以上あったが、同時期の調査でボンボン候補の支持率は既に3割を超えていた。これは知名度に加え、パキヤオ候補を圧倒していた。これは知名度に加え、名士であったことも人気を補強する重要な要素であったためと考えられる。

フィリピン新大統領・副大統領

新大統領
フェルディナンド・ロムアルデス・マルコス・ジュニア
1957年生まれ。父は故フェルディナンド・エドゥラリン・マルコス元大統領。英国、米国で教育を受け帰国。1980年、23歳の若さで地元北イロコス州の副知事となり、1983年には州知事に就任。1986年、エドゥサ革命によって両親とともに米国ハワイに亡命。父の死去後、1991年にフィリピン帰国が許される。1992年、マルコス家再興を図るべく北イロコス州から下院選に出馬し当選。1995年には上院選に出馬も落選。1998年、北イロコス州知事選に勝利し、2007年まで3期務める。2010年、再び上院選に挑戦し当選。2016年、副大統領選に立候補、僅差の次点で落選。

新副大統領
サラ・ドゥテルテ
1978年生まれ。父はロドリゴ・ドゥテルテ前大統領。2006年、司法試験に合格。2007年、父ドゥテルテ・ダバオ市長選に出馬し当選。2010年、市長選に出馬し当選、副市長には父が就任。2013年、父が市長選に再出馬し、一時、政界を離れる。2016年、父の大統領選出馬に伴い市長選に再出馬し当選。2018年、地域政党である「改革党」を立ち上げる。

画像はボンボン・マルコス氏の公式YouTubeより

紐帯で政権基盤は安定か

名門の家名

故マルコス元大統領はルソン島北部の伝統的なエリート家系の出身。ドゥテルテ大統領も南部の新興ではあるものの、レイテ島生まれ、ミンダナオ島育ちという地方のエリート家系に生まれた。そして、彼らが中央政界に進出することで地元政治王朝を確立した。前出の川中豪研究員によると、フィリピンでは「恩顧主義(クワイエンテリスム)」と呼ばれる垂直的な関係性の下で政治動員が図られてきたという。

具体的には、エリート層が低所得層に対して私財の

ボンボン・マルコス 大統領の政権運営

では、新政権の船出はどのようなものになるのだろうか。

ボンボン・マルコス新大統領は、中央政界での実績に乏しいことから、一部経済界からはその手腕に対する不安の声も上がっている。

一方で、サラ・ドゥテルテ次期副大統領は、中央での経験はないが、「ラカスCMD」へ合流したことで組織的な支援を受けられる立場にある。

強権政治は継承されるのか?

最後に、ボンボン・マルコスの政治活動について考えてみたい。焦点となるのは父のようなルネ・ロブレド前副大統領の統治スタイルの継承か否かである。

既に述べたように、これまで両者の人気を支えてきたのはSNSなどを通じて形成された「イメージ」である。ドゥテルテ前大統領のような生身のカリスマ性によるものではない。

選挙期間中は異なり、今後、両者は否応なくメディアの前に立ち、野党などからの厳しい追及に対しては自身の言葉で応えなければならぬ場面が増える。

この際、二世セララらしい良い人として振舞うにせよ、父譲りの強権政治家の姿を演じるにせよ、彼らの最大の後ろ盾である国民の望みイメージを重視せざるを得ず、その統治スタイルについては世論の反応をどう柔軟に調整を図るのかが重要となる。